

令和7年度

新潟県病害虫発生予察速報第1号

(おうとうにおけるクワシロカイガラムシの発生について)

1 発生確認の経緯について

- (1) 下越地方のおうとうにおいて、ウメシロカイガラムシに対する薬剤防除を実施しているにも関わらず発生（寄生）密度が年々増加している園地が散見された（図1及び図2）。
- (2) クワシロカイガラムシの発生が疑われたことから、新潟県農業総合研究所園芸研究センターで同定した結果、おうとうでの本種の発生が確認された（令和7年3月）。
- (3) おうとうでの本種の発生（同定）は、本県初確認である。

2 クワシロカイガラムシの発生生態について

- (1) クワシロカイガラムシはかき、なし、もも等に、外観上類似しているウメシロカイガラムシはもも、おうとう、うめ等に発生する。
- (2) 本県での発生生態は不明な点が多い。他県の情報では雌成虫（白殻状）の大きさは2mm程度の白色・円形で、年2回発生し、幼虫の分散期は5月下旬～6月上旬と8月中下旬とされている。
一方、ウメシロカイガラムシは年3回発生して、幼虫は5月中下旬、7月中旬、9月上旬に現れる。

3 今後の対応と注意点

- (1) クワシロカイガラムシとウメシロカイガラムシとは発生時期が異なるので、（歩行性の）幼虫を対象とした薬剤防除を実施する場合には、園地で発生している種類と発生時期を把握することが望ましい。
- (2) クワシロカイガラムシは、ウメシロカイガラムシと形態が酷似していることから、両種を判別するためには光学顕微鏡で観察する必要がある（図3及び図4）。
- (3) 薬剤防除を実施しているにも関わらずカイガラムシ類の発生密度が増加している場合は、本種の発生を疑うとともに同定等行い、薬剤防除時期の再検討を行う。



図1 枝での発生（寄生）状態
（オレンジ色が虫体、白色が介殻）



図2 介殻を外した状態
（オレンジ色が虫体、白色が介殻）

（画像提供：新潟県農業総合研究所園芸研究センター）

4 クワシロカイガラムシ成虫の簡易同定方法（参考情報）

- （1）園地から生きている成虫を採取し、介殻を外した上でエタノールに浸ける。
同定に用いる個体は、雌成虫が望ましい。
- （2）浸漬した虫体は、ホイヤー氏液をのせたスライドガラスの上におく。カバーガラスをかぶせて、プレパラート・カバーガラスに虫体を封入する。封入の際には、腹部が上に向いていると観察しやすい。作製したプレパラートは、十分乾燥させる。
- （3）プレパラート標本は、光学顕微鏡で200～400倍程度で検鏡する。
虫体の腹部末端を拡大・観察して臀板周縁腺刺の先端分岐の有無、触角の角状付属突起の有無を観察する。上記の分岐・突起がある個体がクワシロカイガラムシである。

（ホイヤー氏液とは、アラビアゴム、クロラール、酢酸、水等で作られる粘度のある封入液剤。配合比率は多少異なるが、標本プレパラート作成には一般的な封入剤。）

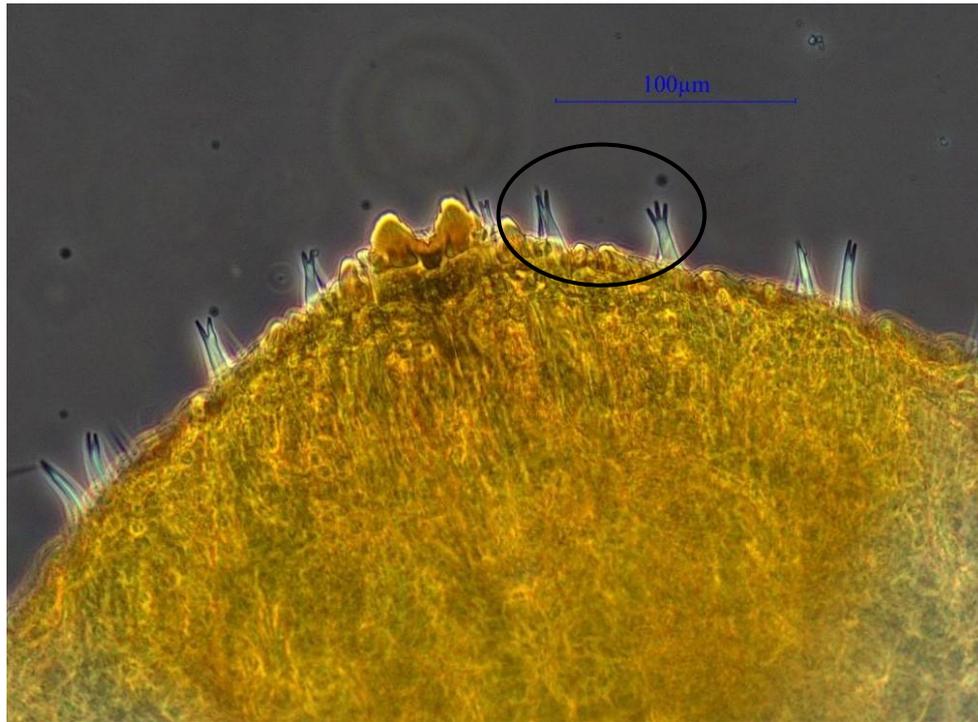


図3 腎板周縁腺刺の先端分岐
(丸で囲った内側に分岐した棘状・突起物があるのを確認できる)



図4 触角の角状付属突起
(丸で囲った内側に角状付属突起物があるのを確認できる)

(画像提供：新潟県農業総合研究所園芸研究センター)